

国際バカロレアの評価方法にみる能力観

御手洗 明 佳

1. 本稿の目的と分析の課題

1-1. 目的と先行研究の検討

本稿の目的は、国際バカロレア (International Baccalaureate: IB) がどのような「知」を重視しているのか、またそれを教育現場でどのように教えるのか、生徒の学習結果をどのように測定するのか分析することである。

IBにおける先行研究は、多くの蓄積は見られないものの大きく分けて三つの視点から言及されている。まず、一点目に「国際理解教育」という視点である。IBOは、「異なる文化の理解と尊重を通じ、より望ましい世界かつ平和な世界を作り出すことに貢献しうる探求心、知性、そして寛容の精神ある若者を育てることを目的としている」(吉田孝 2007: 21) という目的を掲げている。つまり、IBの中心的意味は「国際理解教育」にあるといえるのである。二点目に「西欧型エリート養成プログラム」という視点である。1998年に東京学芸大学海外子女センターが報告した『国際バカロレアの研究』によれば、IBの提供する教育プログラムとは、「英国の教育文化環境を暗黙に想定した、エリート教育の伝統を継ぐ教育課程」、「西欧偏向ないし英国型」、「学問的思考の訓練プログラム」(西村, 1998) といった特徴を挙げている。このような傾向は、日本の教育現場においては特に注目されず、IBが常に「別枠」の教育プログラムとして扱われてきた所以でもある。三点目は「創造性・独創性を育む教育プログラム」という視点である。「子どもの創造性や潜在的能力の開花」(岩崎 2007: 9)、「総合学習を中心の柱においた、珍しい中等教育カリキュラム」(浅沼 1998: 3) といった語られ方から伺えるように「知識偏重主義」とは対極のプログラム事例として述べられている。

さらに、IBの特徴を述べる際に初代IB事務総長(任期1966-1988)であったピーターソン (Peterson, A. D. C.: 1980-1988) の存在は欠かすことができない。その理由としては「ピーターソンの教育理念は、IBに大きな影響を与えている」や、彼が「単に知識を記憶するだけでなく批判的分析や批判的学習を中心としたカリキュラム開発を志向した」といった記述からも伺える。この批判的分析や批判的学習は、IBカリキュラムが重視する能力観であり、一般的にIBプログラムで注目されることが多い「知識の理論」(Theory of Knowledge) を代表例として語られることが多い。

しかし、このような特徴を挙げた先行研究はあるものの、実際にこれらの能力をどのように育てているのか不明である。例えば、「創造性・独創性」、「批判的分析、批判的学習」といった学力観は、

日本においても20年来叫ばれてきた「新学力観」との強い親和性をもつものである（藤田2005）。しかし、如何にしてこれらの能力を生徒たちは身につけているのだろうか。この疑問に答えるため、二つの課題を設定することとする。

まず、一つ目の課題は、「評価基準表を基に、どのような能力に重きが置かれているのか明らかにすること」である。2008年から2009年にかけて行ってきたIB認定校のフィールド調査した結果、各学校の試験問題はすべてその学校の担当教諭が作成していることがわかった。これはIBの理念の一つとして「カリキュラムの柔軟性」を重視する項目が存在するためである。そして、その作成方法はというと、授業構成・試験問題・生徒への評価、さらには評価を行っている教員への評価についても「評価基準表」が用いられていた。これらの点から、IB教育プログラムはガイドブックに記載された「評価基準表」を中心に機能しており、徹底したシステムチックの基、成り立っていることがわかる。よって、本稿ではこの「評価基準表」に焦点を絞り、IBがどのような能力に重きをおいているのか分析することとする。

二つ目の課題として、「IBにおいて重視される能力は、どのよう教えられ、また生徒の学習結果をどのように測定されているのか明らかにすること」である。先行研究で明らかとなった特徴として「創造性・独創性を育む教育プログラム」、「批判的分析・批判的学習」の重視が挙げられたが、この一見抽象的である能力を、IBは如何にして教えているのか、またどのように測定しているのかは不明である。よって本稿は、IBの能力測定の基軸である評価表素材とし明らかにすることを目指す。

1-2. 分析対象

IBは、表1に表わされるように三つの教育プログラムから構成されている。本稿の分析では、11歳から16歳を対象としたプログラムMYP（Middle Years Program：中等課程プログラム）を分析対象とする。MYPは、日本の学年に置き換えるならば、小学校5年生から高校1年生の学年に相当する。さらにこのMYPのうち、G8（中学校2年生）の評価基準表・教材を主な対象とする。

表1. IBが提供する三つのプログラム

16歳～19歳対象	DP (Diploma Program : ディプロマ・プログラム)
11歳～16歳対象	MYP (Middle Years Program : 中等課程プログラム)
3歳～12歳対象	PYP (Primary Years Program : 初等課程プログラム)

分析資料については、2008年から2009年にかけて、日本のIB認定校へのフィールド調査によって集めてきた三点の資料を用いる。

一点目に、MYP（中等課程プログラム）総合評価基準表、二点目に、MYP〔Japanese B〕評価基準表（リーディング・ライティング）、三点目に、IBOが発行する「教師用参考資料」である。

MPYは、8科目（言語A、言語B、人文、科学、数学、芸術、体育、技術）から成り立ち、5つの基本領域（効果的な学習法を育む「学習の仕方」、社会奉仕、健康と社会教育、環境、人類の創造性を学ぶ・「創る人」⁽¹⁾）の相互作用を考慮しながら学ぶプログラムであるが、これらすべての科目、基本領域を総括した評価基準表が一点目の「MYP（中等課程プログラム）総合評価基準表」である。MYPの評価基準表は、これ以外にも各教科、分野ごとに作成されており、例えば「言語B」の「上級」、「オーラルコミュニケーション」についての「評価基準表」といった具合に詳細に亘り存在している。また、IBは二言語習得が必修となっているため、必ず二つの言語の授業を受講する。「Japanese A」は「母語としての日本語」であり、今回取り扱う「Japanese B」は「第二言語としての日本語」でとなっており、習得する学生の割合として日本に滞在する外国人生徒に向けて行われることが多い科目である。二点目に挙げた「MYP（Japanese B）評価基準表（リーディング・ライティング）」とは、言語Bの評価表が、オーラルコミュニケーション・リーディング・ライティングの3点から評価されるうちのリーディングとライティングの二分野を分析の対象にすることを示している。最後に三点目として挙げた「教師用参考資料」とは、先に述べたようにIBの特性が、学校の担当教員が試験問題を作成するという「カリキュラムの柔軟性」であるため、その問題作成の参考例としてIBOが発行している資料である。資料には、例題とその問題例・解答例が記載されている。

2. 分析結果

2-1. MYP 総合評価基準表にみる「創造性」の測定

まず、一つ目の課題である「評価基準表を基に、どのような能力に重きが置かれているのか明らかにする」ため、「総合評価基準表」の分析から始める。下の表が日本語に訳された「MYP 総合評価基準表」である。

表2. MYP 総合評価基準表

レベル	評価内容解説
レベル 1 超劣	目標到達度の点から見て、下記のどの程度にも至らないほど低い。
レベル 2 劣	すべての目標到達度は非常に限られている。要求される知識と技能の理解に問題点が見られ、援助を受けても、通常の下でそれらに応用することができない。
レベル 3 凡	ほとんどの目標に対する到達度は限られ、または、いくつかの分野で明らかな問題点が見られる。要求される知識と技能の理解は限られ、援助を受けなければ、通常の下でそれらを十分に応用することができない。
レベル 4 可	要求される知識と技能を全般的によく理解しており、様々な状況下でそれらに応用することができる。ときおり分析力、総合力、評価能力を確認できる。
レベル 5 良	要求される知識と技能を一貫して、完全に理解しており、様々な状況下でそれらに応用することができる。全般的に分析力、総合力、評価能力を適所に確認できる。ときおり独創性と洞察力を示している。

レベル 優 6	要求される知識と技能を一貫して、完全に理解しており、より幅広い状況でそれらに応用することができる。一貫して分析力、総合力、評価能力を適所に確認できる。一般的に、生徒は独創性と洞察力を示している。
レベル 秀 7	要求される知識と技能を一貫して、完全に理解しており、より幅広い状況でほぼ間違いなくそれらに応用することができる。一貫して分析力、総合力、評価能力を確認できる。生徒は一貫して独創性と洞察力を示し、常に質の高い作品を生みだしている。

（出典：：加藤学園暁秀高等学校・中学校「Bilingual Course MYP Handbook」p.39）

総合評価基準表はレベル1からレベル7で構成されており、レベル7に近づくほど成績が良いとされる。表を順に見ていくと、三つの文章で構成されており、いくつかの決まったキーワードによって書かれていることがわかる。そのキーワードとは、表のレベル7で太字に記した「知識・技能」、「分析力・総合力・評価能力」、「独創性・洞察力」である。このキーワードは何を指しているのか、それぞれに分けて分析していくこととする。

表3. 「知識」「技能」に注目

1	目標到達度の点から見て、下記のどの程度にも至らないほど低い。
2	要求される知識と技能の理解に問題点が見られ、援助を受けても、通常の状況下でそれらに応用することができない。
3	要求される知識と技能の理解は限られ、援助を受けなければ、通常の状況下でそれらを満足に応用することができない。
4	要求される知識と技能を一般的によく理解しており、様々な状況下でそれらに応用することができる。
5	要求される知識と技能を一貫して、完全に理解しており、様々な状況下でそれらに応用することができる。
6	要求される知識と技能を一貫して、完全に理解しており、より幅広い状況でそれらに応用することができる。
7	要求される知識と技能を一貫して、完全に理解しており、より幅広い状況でほぼ間違いなくそれらに応用することができる。

（出典：：加藤学園暁秀高等学校・中学校「Bilingual Course MYP Handbook」p.39 から作成）

表3からは、レベル2からレベル7まで一貫して「知識と技能」について言及していることがわかる。また、レベルが上がるごとに、知識と技能の「理解」が「問題点が見られる」、「限られる」、「一般的によく」、「一貫して、完全に」へと広がっている。さらに「状況」は、「通常の」から「様々な」、「より幅広い」へ範囲を広げ、最後に「知識と技能」は、「応用できない」から「間違いなく応用することができる」へレベルを上げており、「自分で使いこなせる」ことが重要であることがわかる。以上から、「知識と技能」は、どの段階においても「理解」という形で必要な能力として位置づけられ、またそれは、段階が上がると同時に「使いこなせる」幅が、広がっていくことでレベルの高さを示していることが分かる。

表 4. 「分析力，総合力，評価能力」に注目

1	目標到達度の点から見て，下記のどの程度にも至らないほど低い。
4	ときおり[分析力，総合力，評価能力]を確認できる。
5	一般的に[分析力，総合力，評価能力]を適所に確認できる。
6	一貫して[分析力，総合力，評価能力]を適所に確認できる。
7	一貫して[分析力，総合力，評価能力]を確認できる。

（出典：：加藤学園暁秀高等学校・中学校「Bilingual Course MYP Handbook」p.39 から作成）

次に，表を見ると，「分析力，総合力，評価能力」はレベル4以降になってから言及されていることがわかる。これらは，「ときおり」，「一般的に」，「一貫して」と，頻度が増えていき，さらに「適所に確認できる」から「(常に)確認できる」へ，範囲を増やしていることがわかる。

このことから，「分析力，総合力，評価能力」は，一定の「知識と技能」の理解がなければ，行うことができないものであること，また，等級が上がると同時に常に「使える」ようになる能力であることがわかる。

表 5. 「独創性と洞察力」に注目

1	目標到達度の点から見て，下記のどの程度にも至らないほど低い。
5	ときおり[独創性と洞察力]を示している。
6	一般的に，生徒は[独創性と洞察力]を示している。
7	生徒は一貫して[独創性と洞察力]を示し，常に質の高い作品を生みだしている。

（出典：：加藤学園暁秀高等学校・中学校「Bilingual Course MYP Handbook」p.39 から作成）

最後に，表5に注目する。ここからは，「独創性と洞察力」がレベル5以降になってから言及されるようになることが確認できる。また，「分析力，総合力，評価能力」と同様に「ときおり」から「一般的」，「一貫して」と頻度が増えていき，レベル7では，「生徒が一貫して独創性と洞察力を示」した結果，「常に質の高い作品を生み出している」と記載されている。これは，言い換えるならば「生産性」，「創造性」といった能力が確認できると読みとれる。

以上から，「独創性と洞察力」は，「知識と技能」への理解，「分析力，総合力，評価能力」の幅広い利用の先に示すことができる能力であるといえる。そして，その能力を総合した先に「創造性」といった「新たな知見」の創出が行われるといえる。

以上の分析から，一つ目の課題である「評価基準表を基に，どのような能力に重きが置かれているのか」に対して，「常に質の高い作品を生み出す」という，「生産性」または「創造性」といった「新たな知見を生み出す」能力に重きが置かれていることがわかる。さらにその能力育成のため，「知識・技能」，「分析力・総合力・評価能力」，「独創性・洞察力」といった「力」を，習得の度合いによって

明確に階段化し、それぞれの能力基盤による相互作用の結果、より洗練された知見を生み出すことが可能であるといえる。以上の構造を筆者が図式化したものが、図1である。

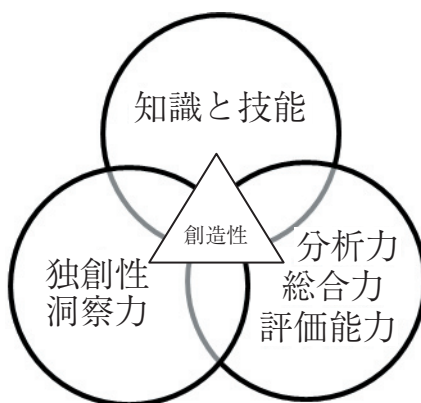


図1. IBにおける能力形成

2-2. 「創造」的文章の読み

それでは、IBが目指す「創造性」は、学校現場においてどのように生み出されると考えられているのか。また、その過程において「知識・技能」、「分析力・総合力・評価能力」、「独創性・洞察力」といった「力」は、どのように関わり合っていくのか。ここでは、「Japanese B」G8の例題を解き、評価の視点を加えることによって考えていきたい。

「Japanese B1」（リーディング）の問題例として、多くの人に馴染みある『浦島太郎』を取り上げる。また、本稿では、問題例だけを記載しているが、実際には、学年相当に書かれた『浦島太郎』の文章を読んで以下の問題に答える形となっている。さらに、以下の表にはレベルを記載しているが、実際の問題にはレベルは記載されていない。問いは、「文章（ここでは、『浦島太郎』である）を読んで、以下の問いに答えなさい。」となっている。

表6. MYP「Japanese B」上級・リーディング 教師用参考資料『浦島太郎』問題例

番号	質問	レベル
1	主人公の名前は何か。	1-2
2	なぜ、主人公は子供たちにチョコレートをあげましたか。	1-2
3	主人公の仕事はなんですか。	1-2
4	亀は主人公をどこへつれていきましたか。どうしてですか。	3-4
5	なぜ、主人公は箱をあげましたか。	3-4

6	竜宮城は素晴らしい場所です。どのように素晴らしいですか。自分の言葉でせつめいしてください。	5-6
7	なぜ、主人公は自分の村にかえりたくなくなりましたか。自分の言葉でせつめいしてください。	5-6
8	このお話は子供のためのお話です。どうしてそのことがわかりますか。	5-6
9	このお話の中で、どのようなことを学ぶことができますか。	7-8
10	最終的に主人公はどのような気持ちになりましたか。自分の言葉を用いて表現してください。	7-8

（International Baccalaureate Organization 2006 より，一部振り仮名を省略）

上記の問いをみると、一見どこにでもありそうな設問である。IBにおけるリーディングとは評価基準表において「文章読解」であるとされている。下記の表7は、「Japanese B」の文章解釈の評価基準表を分析し、「文章解釈」までの流れを表に表したものである。

表7. 文章解釈までの流れ

①把握 ↓	主題・作者の意図
	基本的な情報
②理解 ↓	主題
	文章中の情報
	暗示されている情報 補足詳細
③推論（解釈）・結論の正当性 ↓	根拠
	裏付け
④文章への鋭い理解を示す	独自性・洞察力

（出典：：加藤学園暁秀高等学校・中学校「Bilingual Course MYP Handbook」pp.44-45 から作成）

まず、「①把握」として文章の主題と作者の意図はなんであるのかを文章を読みながら予測する作業である。その作業の一環として、例題「1. 主人公の名前は何ですか。」のような問題によって「知識」を「主題・基本的な情報の理解」として示すのである。次に「②理解」では、文章中の主題、文章中の情報の理解、文章中に暗示されている情報への理解、記載に対する補足詳細への理解を先の「知識」とともに「技能」として「暗示される情報を見つけ出し、抜き出す」、「文体の解釈」として示す。これらの能力は「2. 主人公は子供たちにチョコレートをあげましたか。」で観察できる。

「③推論（解釈）・結論の正当性」は、自分の見解や主張を示すための根拠、裏付けを行う作業である。例えば「6. 竜宮城は素晴らしい場所です。どのように素晴らしいですか。自分の言葉でせつめいしてください。」のような問題に答える際に、文章中からその問いの根拠となる箇所を探し出す。ここで測られる能力として「分析力」が挙げられ、主に「答えへの根拠付け」によって示すこととなる。

「総合力」では、「全体像と細部への注目」が必要である。IBの問題においてこの「総合力」「評価能力」は重要な位置を占めている。文章・用語の難しさを評価基準の側面と捉える日本の国語と比べて、これらの能力は学年の高さ低さに関わらず重視されている項目である。例題「8. このお話は子供のためのお話です。どうしてそのことがわかりますか。」のように、一回全文章を読み、全体像を把握した後に、なぜ、そういう見解になるのか、結論に対する正当性を示すため、細部への注目を必要とする問題である。「評価能力」では、問題の文章（ここでは『浦島太郎』）は「物語として適切か。」といった生徒自身が評価を下す立場の視点を付け加えている。「9. このお話の中で、どのようなことを学ぶことができますか。」からもわかるように、評価を下すためには、この文章が、どのような目的で書かれているのか、どのような機能を果たしているのか、といった視点を示す必要がある。IBにおける文章理解において、文章の長さ長さに関わらず必ず完結した文章が出題される。それは、年齢・レベルに関わらず機能や構造まで踏み込んだ「評価能力」という視点が評価表の中に組み込まれているためである。

最後に文章解釈のまとめとして「④文章への鋭い理解を示す」必要がある。そのためにはみんなと一律の解釈では足りず、「独自性・洞察力」の視点が重要視される。例題「10. 最終的に主人公はどのような気持ちになりましたか。自分の言葉を用いて表現してください。」から考察できるように「自分の言葉で」という問いがIBの問題に中で目立つのもそのためである。IBにとって高い評価を受けるためには、文章を把握し、「知識・技能」を持っているだけでは十分ではなく、自ら示す必要がある。その上で、文章を分析・評価しながら、自分なりの解を導きだすといった一連の流れとなっている。これらの作業は、一貫して知っているという「受身」の習得では可不足であり、「能力」を「積極的」に他者に示していく必要のあるものであるといえる。

2-3. 「創造性」の測定

続いて、課題の二つ目である「その能力（「創造性」）はどのように測られているのか。」明らかにしていく。そのために「Japanese B」（ライティング）の問題例・評価基準表を用いて考察していく。

表 8. ライティング問題 2007 年版 MYP 「Japanese B」標準クラス

	下の 1-4 の話題から一つ選んで、500 字以上書きなさい。
1	今、夏休みで、あなたは日本旅行しています。今日、とてもおもしろい事があって、あなたは日本について新しい事をしました。その体験について、国の日本語の先生に、手紙を書いてください。

表 8 の問題は、「2007 年版 MYP 「日本語 B」標準クラス」の一例である。選択問題で生徒は 4 題の中から 1 題を選択し、500 字以上の文章を作成することとなる。例題 1 に注目すると「今、夏休みで、あなたは日本旅行しています。今日、とてもおもしろい事があって、あなたは日本について新しい事をしました。その体験について、国の日本語の先生に、手紙を書いてください。」という問い

が出題されている。この問いを解く場合、解答者がまず考えなければならないことは、この文章を書く「目的は何か」である。例題1の場合、また「手紙」といった形式が決まっていることから、誰が、誰に向けて、何のために、何を、書くかといった「文章の構造」が存在していることを知っておく必要がある。

文章を採点する際、「メッセージの伝達と構成（Message and Organization）」と「文体と言語の使用（Language and language use）」の二つの評価基準の視点から測られている。この二つの評価基準表をまとめたものが、表9と表10である。

まず、例題1を表8「メッセージの伝達と構成」の視点から分析していく。「メッセージの伝達と構成」において「情報・伝達」、「考え・テーマ」「(自分の)意見」、「話題」、「構成」が大きなキーワードとなっており、「表面的・根拠なし・浅い・不適切」から「複雑な・適切である・根拠あり・深い内容」となるようにレベル1からレベル8までの流れが提供されている。問い1を考えた場合、

「情報・伝達」は、「日本について知った新しいこと」であり、伝達相手は「日本語の先生」である。「考え・テーマ」は問いに沿って設定することが求められる。そして「意見」に関しては、どのように、なぜ、どんな風に面白かったのか、そしてどのような意見を自分は持ったのか示す必要がある。これらの「話題」がどれくらい深い内容であるかは、出来事の内容、それを受けて自分がどのように感じ、何を学んだのか書けるかが重要である。最後に「構成」では、テーマ・意見は一貫しているか、情報を伝えるためにこの書き方、文章構成は適切だろうか、といった評価の視点加わるのである。このような視点から、生徒の文章が何点になるかを教員たちは考察する。ここで、注目する点は、評価基準表は、生徒も共有しており、問題に対する評価は、生徒—教師間だけではなく、生徒—生徒間においても行われている点である。

表9. 評価基準C [メッセージ伝達までの流れと構成]

レベル	情報・伝達	考え（テーマ）	意見	話題	構成
1-2	表面的な	不適切	根拠なし	浅い	不適切
3-4	↑	↑	↑	↑	↑
5-6	↓	↓	↓	↓	↓
7-8	複雑な	適切	裏付け	深い	適切
人へ提供	情報・伝達	アイデア		理解	考えの発展

（出典：加藤学園暁秀高等学校・中学校「Bilingual Course MYP Handbook」pp. 42-43 から作成）

表9「文体と言語の使用」では「語彙」、「文法」、「綴りや書き方」、「読者」、「語調・文体」といったキーワードによって測られているが、表9を見ると明らかなように「語彙」など単体の間違いは特に問題ではなく、「主題に対して適切であるか」、「流れ・選択・使用は適切か」といった「流れ」や「意思」を重要とみる視点がみられる。そして、最後にはいかにその文章は効果的で構成されたものであ

るのかといった「精密さ」、どれほど貢献したかといった「創造性」に重きが置かれていることが考察される。

表 10. 評価基準 D [文体と言語の使用]

	語彙	文法	綴りや書き方	読者	語調・文体
主 題	課題に対して適切か				
一貫性	流れがあるか				
知 識	選択は適切か				
技 能	使用は適切か				
合理性	効果的か				
創造性（生産性）	貢献したか				

（出典：：加藤学園暁秀高等学校・中学校「Bilingual Course MYP Handbook」p.43-44 から作成）

以上の分析から、二つ目の課題「その能力（「創造性」）はどのように測られているのか。」に対する整理を始める。まず、「創造性」という能力は、「知識・技能」、「分析力・総合力・評価能力」、「独創性・洞察力」といった「力」と共に習得の度合いが段階化されている点。さらに問題に対して、目的・方法が明確に設定されていることから、一定の「フォーマット（型）」が常に提供されている、または、目的達成のため有効である「フォーマット（型）」を選ぶといった形式が採られていたことがわかる。以上の見解から、IBの教育プログラムにおいて「創造性」という能力習得のため、明確な課題・目標が設定された上での「フォーマット（型）」の習得であり、その精密さ・独自性によって測定を行っていることがわかった。これらの認識は、「力」といった一見抽象的な「能力観」に対して極めて体系化された「トレーニング（訓練）の可能性」を有するものである。

3. まとめと今後の課題

本稿では、三つの視点から分析を進めてきた。一つ目に国際バカロレア（IB）はどのような「知」を重視しているのか、二つ目に、それを教育現場ではどのように教えるのか、三つ目に、生徒の学習結果をどのように測定するのか、である。

一つ目のIBはどのような能力を重視しているか、に対してはMYP総合評価表の分析を行った結果、「常に質の高い作品を生み出す」または、「新たな知見を生み出す」能力に重きが置かれていることがわかる。これは「生産性」、「創造性」と言い換えることもできる能力である。さらにその能力育成のため、「知識・技能」、「分析力・総合力・評価能力」、「独創性・洞察力」といった「力」を、習得の度合いによって明確に階段化し、それぞれの能力基盤による相互作用の結果、より洗練された知見を生み出すことが可能である構造であることが明らかとなった。二つ目の、それを教育現場ではどのように教えるのか、に対しては、その能力を育成するため、課題の目的と意義を明確に設定するヒント

が問題の中に示されており、その結果、一定のフォーマット（「型」）に則って授業や試験が進められているがわかる。これは、教員から強制的に与えられた「型」ではなく、あくまで課題に対する目的を遂行する手段として一番適した「型」を生徒自身が選びとる、といった過程を踏む。この過程によって、一定量の知識を習得するという形ではなく、生涯に渡って学び続けることができるよう「学び方・思考法」を学んでいるといえる。三つ目の、学習結果をどのように測定しているか、については「創造性」という習得目標に対して、「知識・技能」、「分析力・総合力・評価能力」、「独創性・洞察力」といった「力」を明確に段階化し、目的に対し多角的な視点から「精密さ・独自性」を測っていることが明らかとなった。

日本においても『新学力観』が提示されているように、「自ら学び自ら考える力」、「創造性」といった能力観は重視されている。本田（2005）は、「近代型能力⁽²⁾」と「ポスト近代型能力⁽³⁾」といった能力に対して分類を行い以下のように説明している。「近代型能力」とは、「主に行為としての「努力」—典型的には「勉強」—の量を多く投入することによって向上できる部分が相当に大きく、受験勉強に代表されるような、知識の暗記、公式や文法規則の適用、計算の習熟などの「能力」を伸ばすためにもっとも重要なのは、時間をかけて、しかも効率的に、それらのスキルを自らの頭に定着させること」（同上 2005：23）であり、それに対して「ポスト近代型能力」を構成する諸要素は、努力やノウハウとはなじまない性格のものである。個性や創造性、ネットワーク形成力を「詰め込む」ということは、笑話か笑えない悪夢でしかない」（同上 2005：23）。

以上の見解から、同じ能力育成を目標と掲げている、日本において考えられている「創造性」とIBが育成しようとする「創造性」の間には大きな認識の違いが生じていることがわかる。このような視点は、今後「国際的学力」への検討を行う上で十分配慮が必要な視点ではないだろうか。

本稿においては、IBにおいて如何に教えているか、測定しているかというインプットの部分について分析を行ってきたが、今後の課題としては、どの程度生徒に身につけているのか、というアウトプットの部分への考察も必要であるといえる。以上の課題においては別稿に譲ることとする。

注(1) Approaches to Learning, Community Service, Health and Social Education, Environment, Homo Faber (Man the Maker).

(2) 基礎学力・標準性・知識量 / 知識操作の速度など。

(3) 生きる力・多様性 / 新奇性・意欲 / 創造性・個性など。

引用・参考文献

相良憲昭・岩崎久美子編（2007）『国際バカロレア—世界が認める卓越したプログラム—』明石書店

浅沼茂（1988）「批判思想から見たカリキュラム研究の可能性」『教育学研究』第55巻，pp. 257-266

ドミニク・S・ライチェン，ローラ・H・サルガニク（2006）立田慶裕・監訳『キー・コンピテンシー——国際標準の学力をめざして』明石書店

樋田大二郎（2006）「シンガポールとの比較から見た高校の「学力」の課題」『ニュース「ねぎす」』教育研究所神奈川県高等学校教育会館

藤田英典（2005）『義務教育を問いなおす』筑摩書房

加藤学園暁秀高等学校・中学校 Bilingual Course 『MYP Handbook 2008』

西村俊一編著（1989）「国際的学力の探求—国際バカロレアの理念と課題—」創友社

本田由紀（2005）『多元化する「能力」と日本社会—ハイパー・メリトクラシー化のなかで』NTT出版株式会社

P. プルデュール, ジャン=クロード・パスロン著, 宮島喬訳（1991）『再生産〔教育・社会・文化〕』藤原書店

佐藤郡衛（2007）「国際理解教育の現状と課題：教育実践の新たな視点を求めて」『教育学研究 74』（2）pp. 215-225, 日本教育学会

渡辺雅子（2003）「「個性」と「想像力」の日米比較」, 河合隼雄編『「個人」の探究—日本文化のなかで』日本放送出版界